

## 花袋君の作と生き方（三）

柳田 国男

いわゆる自然主義の流行をもって、単なる明治文学史のある一期の現象のように解することは、今は何よりも事実がこれを許さぬであろう。人がこの名前を喜んで名乗るか否かは別として、とにかくに文芸に趣向という語が、入用でなくなったのはあれからであった。自分で見てきた感じてきたということに、大きな尊敬が支払われるのみならず、しばしばその報告の精密と真率さが、技巧の欠乏を補うというよりも、寧ろ技巧そのものとして受取られることになったのもあれ以来のことである。新たな人間記録はかくの如くにして、尚この上にも集積せられんとしている。私にはこれ以外の一つの門口から、持ち込まれた傾向とは見ることが出来ぬのである。かつての田山君等は無論この様に放漫なる定義に概括せられることを諾しなかつたろう。または気難しく差別の見を立てたであろうが、あの人たちとても各自の変遷をもち、また相互の特色を備えていた。文学は由来貨幣などどちがって、同じだといえれば却って通用が困難になるものだ。だから能うべくくんば毎年でも、異を立てて前進しようとするのであるが、そのために底を流れてきた個人以上の力、もしくは共同の功績とも名づくべきものを、無視してしまうことは不可能

である。

独り遠くから眺めた文芸の国ばかりに、そういう事実があるというのではない。たとえば我々の携わっている社会科学の方面でも、名士の独断なるものが必ずしも傾聴せられず、次第に銘々の分担をもって、もう一度直接に観察しまた記述しておこうとする学風に向ってきたのは、一半は少なくとも文学の自然主義の、影響で無かつたとはいわれぬのである。殊に私などが題目の大きい小さいについて、まるで世間と掛け構いのない尺度を持ち、果たして現実の用途があるか否かを確かめなくとも、平気で記録を取って残しておくことが出来るようになったのは、善かれ悪かれ、とにかくに田山君の感化であった。それを生前に話してみるのはなかつたが、聴いたところで何とも思わなかつたかもしれぬ。今までの文士は一樣にいたって無邪気であった。いわゆる突っ込んだ描写を要件とした、作物が、世上に与える恩恵について無知であった。自ら社会の観測と記述とを、職務としてしていると称する者が、実は技能において遙かに劣っていることに心つかかなかつた。いわゆる暴露文学の大いに起こるべき素地は、早くからあつたのである。それが正直にしてかつ無理のないものだったならば、当然に我々を学ばしめたのであつた。しこうして我田山君の色々な作品などは、期せずして自からそれであつたと思う。

昔自然主義の過渡期に青年であつた者は、

幾度か無益のき憂論を聞かされていた。人をもし単なる生物の一つとして、その生き方を見ていこうとすれば、人と人との間の情愛はどこへ行くという、類の言葉が、もつとも沈着なる人々の口からも出たのであった。今においてその言の当たらなかつたことを、これも私は確かに実験し得たのである。田山花袋君の死はその多くの旧知によつて、大いなる樹木の倒れるにたとえられたが、私は殊にその若き苗木の日を知り、茂り花さいて色々の鳥の、来たり憩う光景を仰ぎ見た上に、さらに落木しよう條の風の音をさえ聞いたのである。仮に本物の樹であつてもやっぱり悲壮である。ましてやこの一個の生存には、その後に色々の現実が続いている。六十年もかかつてまだ生き尽くしえなかつた田山君の生き方は、我々にとつていつまでも歴史で無い。(完)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より